



聖ヨセフとわたし

聖ヨセフ年(今年12月8日まで)を記念し、霊名がヨセフの司牧者に聖ヨセフにちなんだものの紹介や個人的な気づきをシェアしていただく。



Br ヨゼフ佐藤達郎
(フランシスコ会)

聖なる家族の父親、聖ヨゼフ

私は24歳で受洗。ちょうど60年になるので今年が聖ヨゼフの年であることを嬉しく思います。私が聖ヨセフの洗礼名をいただいたのは、シスターの姉が長崎の聖フランシスコ病院に勤めている時に、本原にある聖フランシスコ修道院の故ヨゼフ岩永富一郎修道士を見て、修道者として教会に忠実に静かに仕えるその姿から弟の私が洗礼を受ける時には、ヨセフの霊名を、と決めていてくれましたので、私はヨセフ名をいただきました。

受洗後、聖書から聖ヨセフは、天の父の声(マタイ1・21)を聞き、信仰深く主のお望みのままに行動する方で“聖なる家族の父親”役を立派に果たされたのを福音に見ることが出来ました。私も修道者として聖ヨセフのように静かに仕え必要とされることに努めていけたらと思います。

私は洗礼を受けてから3年後東京に出て働き、30歳でフランシスコ会に入り、45歳からアフリカ・プロジェクトと中国プロジェクトに参加し、アフリカに10年、中国で14年、小さな人びとの中に住み、父親の役をさせていただきました。生野修道院には10年前に派遣され、現在は中谷 功神父と光令化に……いや、高齢化でした😊 高齢化を生きさせていただいております。

聖ヨセフの年に感謝して。イエス、マリア、ヨセフ。
イエス、マリア、ヨセフ。

「それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった」(ルカ2・51)。



美しいものを
信じて



畠 基幸神父から
この一冊

司牧者がリレー形式で若者たちに読んでほしい書籍を紹介し、青年たちの読書感想文を掲載する連載。今回は畠基幸神父様(御受難修道会)が担当。



『美しいものを信じてー兄弟を通して神様のもとへ』(編集・監修 フォカラーレ、サンパウロ、2017年、税込1320円)

ミヤンマーから帰ってきて、パウロ書店に立ち寄って手にしたのがこの本です。

私が二年間過ごしたパテイン教区の小神学校の食堂の正面左に掲げられた額には、「十字架に見捨てられたイエス、それは、コミユニオン(交わりと一致)の霊性の土台、一つの文化への“出会い”の鍵」と書かれていました。これは、誰のことば? と聞くと、フォカラーレ(マリアの業)の共同体から寄付を受けたときに、これも一緒に寄贈されたとのこと。中央の最後の晩餐の伝統的な絵の右

側にはヨハネ・セイ・ヒー司教様(パテイン教区)の額もありました。思えば、これは司教様の霊性の土台だったのです(コロナ感染のため、7月22日帰天。哀悼を捧ぐ)。

さて、フォカラーレ? 一体、どんな団体なのか。ミヤンマーの教会では、この団体はよく受け入れられていると地元のシスターから聞きました。国民の89%が上座部仏教の仏教徒の国で、喜捨や布施が文化の一部になっており、道端の物乞いにも気前よく慈悲が施されます。この世で功德を積むことが極楽浄土への道と日頃から教えられ実践されている国なのです。だから「天国の鍵」の理解は容易だったかもしれません。「一つの文化への出会いの鍵」は、天国への鍵の権能をいただいたペトロのこと

を連想させるからです。でも、いかなる文化でも、「見捨てられた十字上のイエス」と出会うことは難しいでしょう。「目に見える兄弟を愛せないで、どうして目に見えない神を愛せましょう(1ヨハネ4・20)」。フォカラーレの創立者たちは、この言葉を「交わりと一致の鍵」として隣人愛の重要性に気づかせてくれます。しかし、未だに異文化の兄弟を受け入れるハードルは高い。しかも「捨てられたイエス」とは、最も身近な「私」のことでもあるのです。この本は、日常の心の壁を乗り越えた生きた体験の証言集です。少しずつ読んで自らを振り返るのに最適です。

次回は、井田明神父様(吹田教会)です。



「信仰の時間」

ABC ラジオ(朝日放送)
毎週日曜日 5:50~6:00AM

9月担当: Sr.戸村晴美(師イエズス修道女会)

エッファタ・開け!

(5日放送分より)



今日の福音箇所(マルコ7・31~37)を読むと、「いつの時代にも心優しい人びとがいるのだなあ」と改めて感動します。

イエスは、ティルス、シドン、ガリラヤ、デカポリスと巡り歩きながら、宣教活動を続けておられます。ティルス地方では、悪霊に取りつかれた幼い娘を持つ母親がイエスのもとにやって来て、娘を癒してくださいと頼みこみます。イエスは、足元にひれ伏して願う彼女の頼みを聞き入れて、幼い娘から悪霊を追い出しました。

今回、人びとはイエスがデカポリス地方に来られたと耳にしたのでしょうか。「耳が聞こえず、舌が回らない人をイエスのもとに連れて」来ました。当時、病気や障がい「罪の結果」と考えられ、その人自身が

その先祖が罪を犯したために病気になったり、障がいを持つようになった……と考えられることが多かったといえます。人びとはこの「障がいを持つ人」を、当時評判になっていたイエスのところに連れて来て、「手を置いてくださるように願った」のです。

耳が聞こえないこの人に理解してもらうために、人びとはどのような方法を用いたのでしょうか。声をかけ、手を引き、身ぶり手ぶりで説明しながら、一緒に、イエスのもとに行ったことでしょう。そして「その上に手を置いてくださるように願った」ことでしょう。イエスがこの人を癒されたのは、彼を連れてきた周囲の人びとのためでもあったように思います。

「エッファタ! (開け)!!」

——聞こえなくなっている耳よ、開け!! 音のない世界よ、開け!! 人のことばが聞こえないもどかしさよ、開け!! この人を取り囲んでいる無感動の闇よ、開け!! いのちを救い出す人のことばが、あなたの耳に入るように! あなたを取り巻く社会の音が、あなたの耳に入るように! あなたの周りで生きている人びとの生活の音を聞くことができるように! 開け! 開け! 開け!!

「音のない世界に生きる」自分を想像することは不可能です。それほど、わたしたちは音のある世界に生きています。イエスに癒されたこの人は「耳が開け」「舌のもつれが解けて」「はっきりと話すようになった」とあります。不思議なことに「耳が聞こえるようになった」とは書いてありません。これは「聞こえる」ということと、「耳が開いている」ことの違いを表しているように思います。福音書には何度も「聞く耳のある人は聞きなさい」という言葉が出てきます。「耳が開いている」ということは「聞く耳がある」ということと近いのではないかと思います。耳が開いている=相手のことば

が、ダイレクトにわたしの脳に入り込んでくる。先入観/偏見/自分なりの解釈/思い込み……そんなものに邪魔されることなく、ダイレクトに入り込んでくる。

そうしてこそ、人は、耳にしたことを「正しく伝える」ことができるようになるのではないのでしょうか。これは簡単なようで非常に難しいことです。しかし今日の福音はそれが不可能ではないことを教えています。

先入観/偏見/自分なりの解釈/思い込みがある時、わたしたちは「伝えなければならない大切なこと」を、「的確に伝える」ことができません。今日の福音の最後に、「イエスは、このことをだれにも言わないように」と人びとを戒められます。人びとが思い思いに伝えていく「ことば」はいろいろなところで「尾ひれ」がついて拡散していきます。枝葉がつき、真実とは全く違うものとなって、人の間に広まっていくことも多いと思います。

わたしたちの耳は「開いて」いるのでしょうか? それともただ「聞いて」いるだけなのでしょうか?